

デュアルユース技術と大学

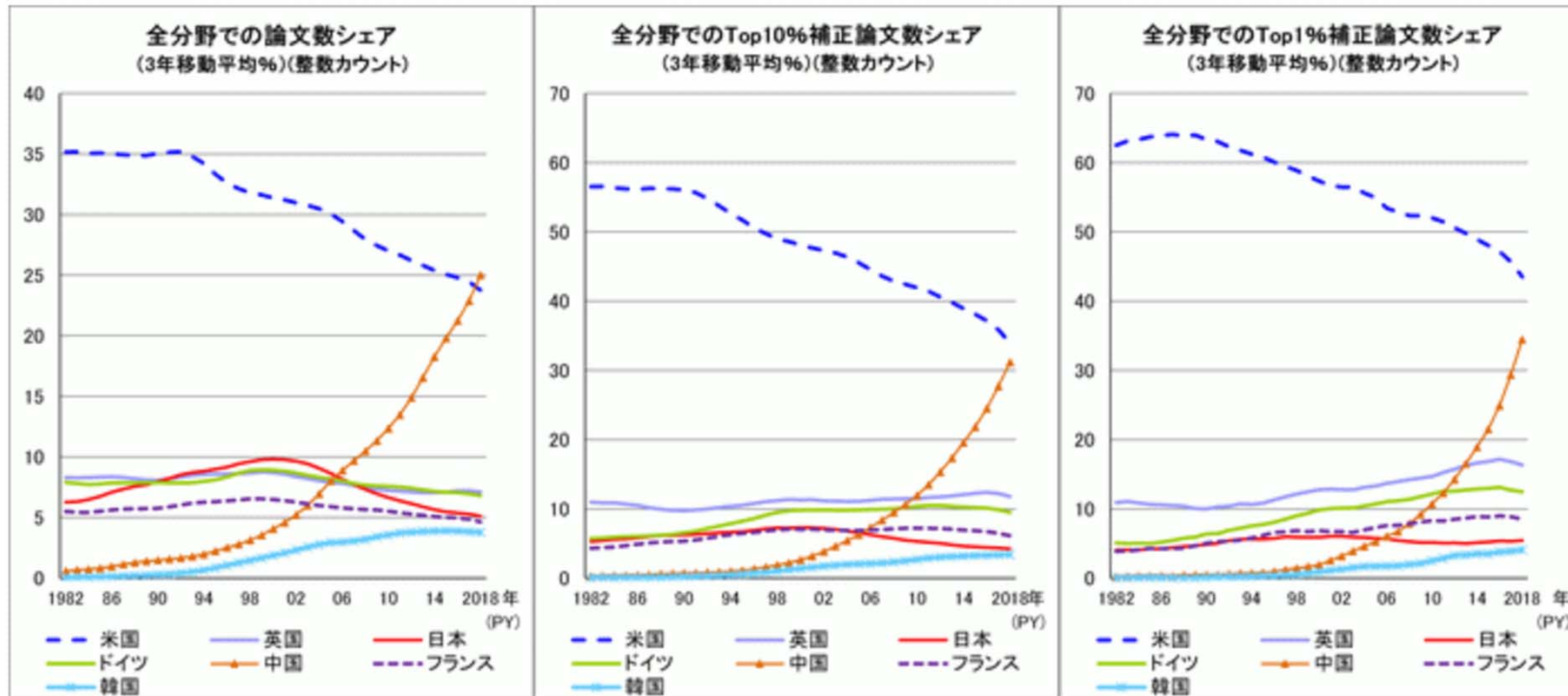
大学の現状から考える

中部大学特任教授

辻 篤子

【図表4-1-7】 主要国の論文数、Top10%補正論文数、Top1%補正論文数シェアの変化
 (全分野、整数カウント法、3年移動平均)

(A) 整数カウント法による



文部科学省科学技術・学術政策研究所による

大学のいま

- 国立大学の運営費交付金は毎年1%の削減
- 博士課程進学者の減少
博士号取得者は2006年度の1.8万人をピークに約1.5万人に
- 研究従事者数（FTE,研究時間を考慮）は先進国中最低で低減傾向
（米国の化学者が研究に使っている時間は42%と問題に。日本は13%）
- 論文数、被引用論文の減少
トップ10%論文数の世界ランキング
1998年の4位から2018年は10位
- 将来の科学技術立国に黄信号？

デュアルユース技術と大学

- ウイルス研究などの基礎研究でも、バイオテロなどに利用される恐れがあり、論文公表が差し止められた事例。AIやナノテク、ロボットなども同様
- 大学の研究のほとんどがデュアルユース的性格を持ち、その潜在的可能性を秘めた技術が集積している。適切に統制・管理する必要がある。（小林氏）

大学に求められるもの

- 考えたくないことを考える（西山氏）
自分の研究している技術が兵器に応用されるかもしれないということを「考えたこともなく」、「考えたくもない」かもしれないが、自分の技術能力を知り、その影響を考えておくべき
- 答えのない問題をないことにしない
- 大学だからこそ、やるべきであり、できることでもある
- 海外の事例なども十分に理解したうえで、ていねいな議論を

大学のミッションとは

- 長期的な視点で、社会のあるべき姿を考える
- 軍事研究にこだわらない「新しい安全保障研究」をめざすことも検討すべき
(鈴木氏)
- 大学での研究の基本条件は「自律性、透明性、公開性」
- 自由な研究環境でこそ、新しいアイデアが生まれ、伸びていく
- 未来を切り拓く人材を育てる場としての大学
- 未来のため、大学という場をいかに生かすのか。大学人の自覚が重要